

## S2-3

## 子どもの気になる食行動の見方とその指導

笹田 哲

神奈川県立保健福祉大学  
リハビリテーション学科作業療法学専攻

子どもの家庭生活、保育園・幼稚園、学校生活では、遊び、食事、着替え、学習など様々な場面で手を使うことが実に多い。しかし不器用な子どもにとっては、つらい場面となる。上手に使えない原因を探らない限り、ただ手遊びや手作業をいくら繰り返し行ってもできるようにはならない。母親から「指先が不器用で箸が使えません」という相談をよく受けます。子どもの日常生活の中では、クレヨン、鉛筆、はさみ、スプーン、箸など様々な道具・食具を両手で使うことが求められる。

気になる食行動の原因を調べ、支援につなげるツールとして、「動きのピラミッド構造」を活用してみることを筆者は推奨している。ピラミッド構造は動きを4つの段階に分けて捉えている。

第1段階は姿勢保持機能でいわば、土台となる部分である。第2段階は手指の操作機能であり、第3段階は見るなどの感覚機能となる。そして第4段階は認知機能として位置づけている。子どもの動きを、ピラミッド構造で分析すると以下のようなになる。

「指先を上手に使うためには、頭で考える（第4段階）だけでなく、手元をよく見て（第3段階）、座り続けながら（第1段階）、指先を操作する（第2段階）ことが必要」と捉えることができる。

第2段階をさらに細かくみていくと、手の動きを2つに大別することができる。それは、「握り」と「つまみ」という動きのパターンである。発達の段階からいうと、握りが先に獲得され、それから、つまみができるようになる。手のひら全体を使うことができたら、指先の部分の使い方ができるようになる。握りやつまみが上手に使えるためには、実は手首の動きが必要となる。

このように、「動きのピラミッド構造」で捉えると、指先を使うことは、指先の筋肉のみで行っているのではなく、座りがしっかり保持できることが前提条件になる。加えて、見る、ものに触る、力を入れるなどの感覚機能も働かせることも重要である。

本講演では、気になる食行動を読み解くカギとして、「ピラミッド構造」の視点から食行動の問題に対して、どこを観察すればよいのか、どのように指導につなげればよいのか解説する。